1.現状

英語化マニフェスト2015（教職員篇）～何のための「授業の英語化」か？～　11/06

1．社会における情勢

日本企業の動向　→ 市場開拓 → 海外展開 → グローバル化 →
日本のみではすでに限界があり、垣根を越えた活動が不可欠 → 重要会議や書類を英語化

世界における英語使用者の数と割合 → 20億人 総人口の1/3 との報告もある

企業のグローバル化に伴う大学に対する人材養成の要請 → 大学改革

英語によるコミュニケーション能力の向上が不可欠　グローバル人材の育成・採用

金沢大学ブランド 英語ができる卒業生

2．金沢大学における情勢

KU-GLOCS Kanazawa University Global Challenge Series

2014　ｽｰﾊﾟｰｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ大学創成支援事業に採択

＜何のための「授業英語化」か？＞

↓

学生に身に付けさせる能力としては以下の２点

(1)英語によるコミュニケーション能力を向上させ、それを将来の職場や生活環境において活用できる

(2)自分の専門分野や履修した科目の分野の内容を英語で理解し、英語でそれを他者に伝えることができる

↓

ハイブリッド方式の英語化推進（学内いたるところで英語によるコミュニケーション）

↓

本学独自のバイリンガル・キャンパス（バイリンガル大学）

英語化マニフェスト2015（教職員篇）～何のための「授業の英語化」か？～

本文pp.4-6

2.授業のスタイル

100%　　100%

「完全英語化」・・・
授業の説明及び教材等のすべてにおいて100%英語が用いられている。

「部分的英語化」・・・
授業の説明及び教材等のそれぞれに関して、かなりの割合で英語が用いられている。

「説明やディスカッションを少しでも英語で」・・・
英語の発話量はそう多くはないが、授業内容として有益かつ効果的な部分をオーラル英語によって説明・議論する。

「教材等を少しでも英語で」・・・
教材等のすべてではないが、テキストや講義資料、試験問題などに関して、有益かつ効果的な部分が英語化されている。

0%　　0%

授業の説明　オーラルコミュニケ-ション

講義資料　教材

英語化マニフェスト2015（教職員篇）～何のための「授業の英語化」か？～

3.ハイブリッド方式の英語化 フォローアップ体制

ハイブリッド方式の英語化

事務職員

教員

- 人間社会研究域
- 理工研究域
- 医薬保健研究域
- 学内のセンター等

教員の教授力向上

具体な支援策
・ビジネス英語研修等

スーパーグローバルELPセンター
・英語による教授法（教員の英語による教授能力の向上）
国際化を自立的に維持できる基盤を整備

具体な支援策
・対面授業（ｵｰﾗﾙｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ、模擬授業等）
・オンラインによる課題提出（ｱｶﾃﾞﾐｯｸﾗｲﾃｨﾝｸﾞ、教授法等）

連携協力

学生

学士課程学生
博士前期課程学生
博士後期課程学生

学生の英語ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ力向上

国際基幹教育院
国際教育部門/言語教育部門
・GS言語科目(英語)　EAP科目　TOEIC準備クラス
・GS言語科目（初習言語、日本語）

具体な支援策
・講義単位取得
・外部試験得点による客観的評価
・タフツELP学生英語研修ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ

英語化マニフェスト2015（教職員篇）～何のための「授業の英語化」か？～　本文pp.9-10

4.今後の方向性

（一）SGU調書で約束した数値目標を達成することに全力を挙げるが、**数値そのものに過度にこだわって学生の理解をおろそかにしない。**

（二）「英語化」の実施に際しては、**all or nothing の態度を取らず**に、「教材等を少しでも英語で」あるいは「説明を少しでも英語で」行うことによって、「授業の英語化」の裾野をできるだけ拡げることが最も大事だと考えられる。**全ての教員がこのような意味で「授業の英語化」に参加することが、本学の教育における国際化の第一歩**である。

（三）本学においては、「掛け値なしに100％英語で行われる授業」が決して理想的なのではない。むしろ、主題領域、学生、学年等に関してきめ細かく配慮された英語化がそれぞれの授業に関して行われるべきであり、その際、**日本語と英語の両方が適切に組み合わされた「ハイブリッド型」授業**が求められる。

（四）このハイブリッド方式の英語化を様々なレベルで全学的に推し進めること、これが、キャンパス内のいたるところで英語が用いられる環境を自然に創出することを可能にする。その時こそ本学は、日本語と英語を縦横に駆使した多彩な知の織物、２つの言語が織りあげる多様な知のデザイン、すなわち**本学独自のバイリンガル大学（バイリンガル・キャンパス）**となるだろう。

英語化マニフェスト2015（教職員編）～何のための「授業の英語化」か？～　本文pp.4-5

授業のスタイル(参考1)

（1）「完全英語化」･･･授業の説明及び教材等のすべてにおいて100%英語が用いられている。

　これは、英語しか理解できない留学生の受講を想定した、100%英語化された授業。SGUの構想で、各コースに設置予定の「英語の授業のみで卒業できるプログラム」を構成する授業。

しかし、本学にとって、この「完全英語化」は、**無理矢理に追求すべき理想ではない。**

（2）「部分的英語化」･･･授業の説明及び教材等のそれぞれに関して、かなりの割合で英語が用いられている。

　文部科学省が示す「英語化された授業」の基準は、英語化率「80%」以上。数学や物理学などの理系の基礎的科目、心理学や経済学などの文系の理論的科目において、学生の理解度を睨みながら、適切な割合での英語化を進めるべき。

「80%以上」は、その適切な英語化の結果として達成されるのが最も理想的。

英語化マニフェスト2015（教職員編）～何のための「授業の英語化」か？～

本文pp.5-6

開講のスタイル(参考2)

（3）「説明やディスカッションを少しでも英語で」･･･英語の発話量はそう多くはないが、授業内容として有益かつ効果的な部分をオーラル英語によって説明・議論する。

ｽｰﾊﾟｰｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ大学創成支援事業の目標値達成にはカウントされないが、目的達成には極めて重要な授業。

先の(1)や(2)の裾野を広げ、本学の英語使用環境の充実を担う。

例えば、『源氏物語』講義の場合、適宜、英語による資料と組み合わせながら行う。一見、英語化が困難と思われる多くの科目でも実施可能。

(4)「教材等を少しでも英語で」･･･教材等のすべてではないが、テキストや講義資料、試験問題などに関して、有益かつ効果的な部分が英語化されている。

ｽｰﾊﾟｰｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ大学創成支援事業の目標値達成にはカウントされないが、（3）と同じく、目的達成には極めて重要。

これも、上の(1)や(2)の裾野を広げ、本学の英語使用環境の充実を担う。

国家試験の必修科目や教職科目など、オーラル英語による説明ではなく日本語による説明が学生から強く要望される幾つかの科目で想定される。

しかし、その場合でも、有益かつ効果的なやり方で英語化が可能。

（5）「全く英語化できない」･･･そのような科目は存在しないでしょう。